



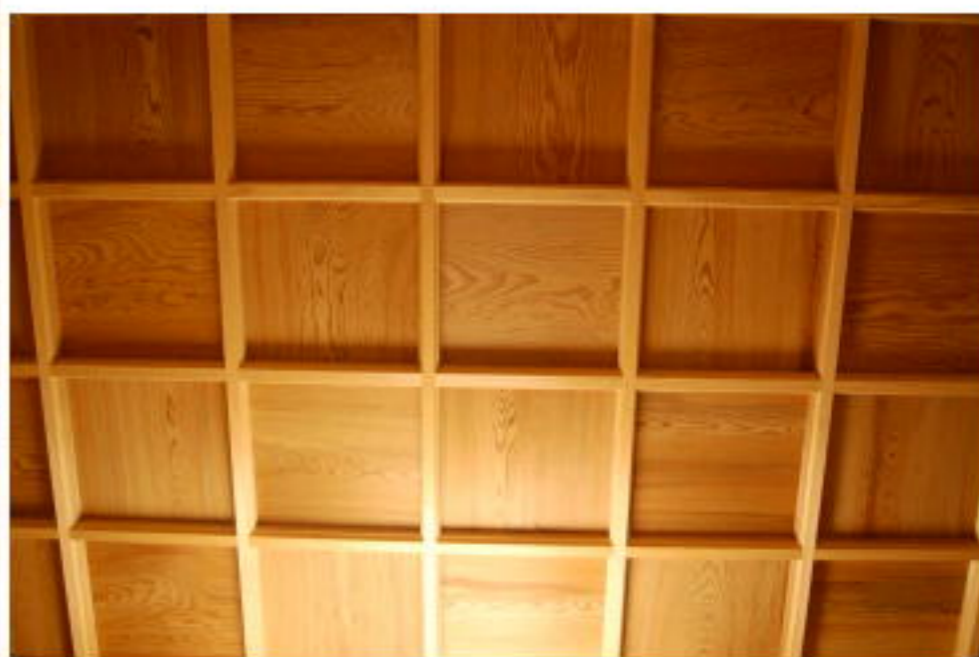
写真左／土間に据え付けてある大工さん特製の囲炉裏（樺・桐置）。壁は錯壁。写真右上／2階吹き抜けから見下ろした1階の薪ストーブ。梁は木目の美しさを引き出す手斧（ちょうな）仕上げ。写真下／座敷の様子。



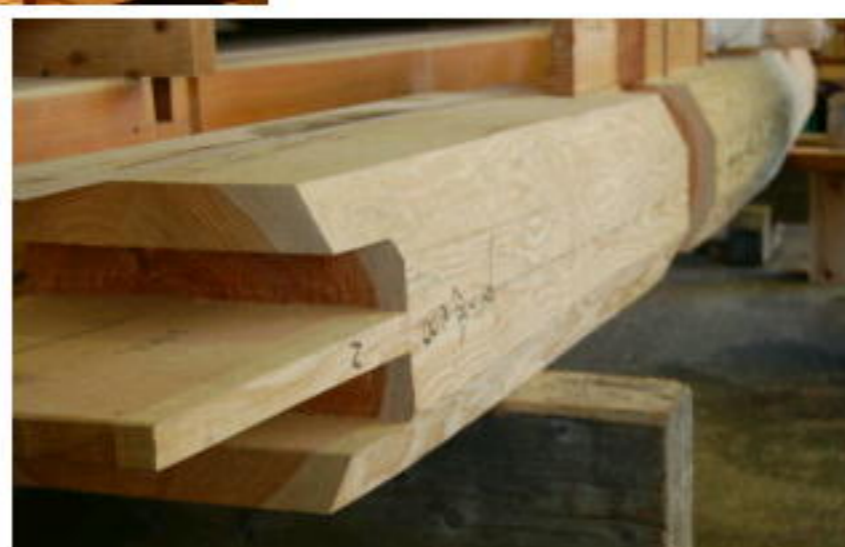
写真上／構造材には釘を使わずに、コミ栓を使うことで、解体・再生がしやすいようにしている。写真下／2階図書室の入り口。建具にはアクセントとしてステンドグラスをはめ込んでいる。



写真上／大工さん特製の座敷欄間のつがいの鳳凰。松の板に透かし彫りで作成してある。写真下／座敷の格天井。伊勢神宮境内にあった杉から作成。



写真上／大工さんが刻んだ、軒を支える肘木に彫られた飾り。写真右下／黄昏時の和水の家の外観。外壁、内壁は漆喰壁仕上げ。写真下／土間に使う梁。構造材は全て手刻み加工。



いつの頃からか私は木造建築物に惹かれるようになっていました。これまで球磨郡水上村、小国町西里に勤務し、それぞれの地域に建つ木の家を見つけては、その家の造りやデザインを写真におさめ、家に帰ってからスケッチをする、という習慣が付くようになり、最終的に自分が地元に戻り、終の棲家を建てる決意をしたときに出会ったのが昇陽建築工業の村上さんでした。村上さんにお願したのは、次のような事でした。木の存在感を味わえること。伝統的な技法で建ててほしいこと。デザインは古民家風であること。他にも細かい話をしましたが、嫌な顔一つせずいつも「面白そうですね。やりましょう！」と快く引き受けてくださいました。ここに掲載した写真の通り、見事な技法でしっかりとした家を作って頂きました。この和水の家に使われている木は大部分が杉ですがその内訳は、小国杉・日田杉・綾杉はじめ数種類の杉が使われています。また、樺、桐、他全部で大体十七種類の木を使っています。木の圧倒的な存在感を感じられるこの家に住んでいると、仕事の疲れも忘れ、家に住むこと自体が楽しいイベントとなつていきます。それも木の良さを最大限に引き出してくださった村上昇陽さん、そして、この家の建築に関わって頂いた多くの職人さん方のおかげです。素晴らしい家を本当にありがとうございました。

